

“Typhoon”における他者の構造

The Structure of Others in “Typhoon”

後 藤 隆 浩

1

Joseph Conrad の “Typhoon” (1902) のテキストの読解過程においては、中国人クーリー達が存在が、物語内容レベルにおける最大の問題点として読者の意識に浮上してくるだろう。汽船ナン・シャン号という小さな共同体内部に、クーリー達は完全な他者として存在している。テキスト内に、共同体と他者との関係性という一般的レベルの問題が、生成しているのである。物語言説のレベルにおいては、他者としてのクーリー達が、いかに語られているかという具体的な問題について考察する必要があるだろう。本論においては、テキストの語りの主体の言説におけるクーリー達の語られ方およびテキスト内の登場人物達の言説におけるクーリー達の語られ方に着目して分析を進めていくことにする。これらの分析によって、“Typhoon” というテキスト全体が内包するところの他者に対する視線、思考と認識の型を取り出すことができるだろう。テキストの語りの主体は、どのような原理に基づいて他者を表象していくのであろうか。そして意識的な読者は、テキストの批評的読解において、どのような他者の構造を認識するのか。作品構造と読者の意識との相互作用の関係性が、分析の基盤となるだろう。

物語内容の舞台となる汽船ナン・シャン号は、船主の意向により船籍が英国からシヤムへと変更されているが、その共同体としての基盤は、英国である¹⁾。実質的英国船ナン・シャン号は、物語内の現在、熱帯地方の植民地での労働を終えて帰国する二百人の中国人クーリー達を乗せて航行している²⁾。物語内における船の動きの起点を、テキストの語りの主体は次のように語り始める。

The *Nan-Shan* was on her way from the southward to the treaty port of Fu-chau, with some cargo in her lower holds, and two hundred Chinese coolies returning to their village homes in the province of Fo-kien, after a few years of work in various tropical colonies. The morning was fine, the oily sea heaved without a sparkle, and there was a queer white misty patch in the sky like a halo of the sun.³⁾

ここまでの語りは読者に客観的な状況を提示しており、機能的な言説であるといえよう。この後に続く語りの言説においては、次のようにクーリー達の様子が描写されていく。

1) 組織における労働のメカニズムという観点において、ナン・シャン号は有機的な小さな共同体であると言える。ただし、乗組員は全員男性であることに留意する必要がある。作品内に登場する女性は全員乗組員の家族であり、陸上の家庭での生活者である。

2) クーリーという語の表記に関して、『世界大百科事典』（平凡社、1988年）の「クーリー」の項においては、次のように説明されている。「語源については必ずしも明らかでないが、一般的にはタミル語の雇用という言葉を英語で coolie, cooly と表示し、それを漢字で苦力とあてたとされる。中国人は外来語を、意識でなく音で表示する場合に、音が相似していて意味内容が適切な漢字をあてる。苦力はその典型例で、苦しい力役に従事する労働者という意味を出している。」

3) Joseph Conrad, “Typhoon,” *The Nigger of the “Narcissus” and Typhoon and Other Stories* (“Collected Edition of the Works of Joseph Conrad” ; London: J. M. Dent and Sons, 1950), p.6. 以下引用はすべてこの版により、本文の括弧内に頁数を示す。具体的箇所へ言及する場合も同様に本文の括弧内に頁数を示す。

The fore-deck, packed with Chinamen, was full of sombre clothing, yellow faces, and pigtailed, sprinkled over with a good many naked shoulders, for there was no wind, and the heat was close. The coolies lounged, talked, smoked, or stared over the rail; some, drawing water over the side, sluiced each other; a few slept on hatches, while several small parties of six sat on their heels surrounding iron trays with plates of rice and tiny teacups; (pp. 6-7)

このような詳細な描写の基層に、多くの読者は、他者に対する観察者としての視線の動きを感じ取るであろう。語りの主体にとってクーリー達は、視線の対象となり得る強い異質性を示す存在なのである。

さらに語りが続くと、語りの主体の意識の基層に存在するところの認識構造、価値判断基準といった要素が、テキスト表層に浮上して言語化されるのである。先の引用部分の後、テキストは次のように続いていく。

and every single Celestial of them was carrying with him all he had in the world—a wooden chest with a ringing lock and brass on the corners, containing the savings of his labours: some clothes of ceremony, sticks of incense, a little opium maybe, bits of nameless rubbish of conventional value, and a small hoard of silver dollars, toiled for in coal lighters, won in gambling-houses or in petty trading, grubbed out of earth, sweated out in mines, on railway lines, in deadly jungle, under heavy burdens—amassed patiently, guarded with care, cherished fiercely. (p. 7)

以上の語りの言説の形態から語りの主体を具体化して物語内の語り手という概念を設定してみるならば、この語り手は、少なくとも中国人ではないと読者に判断されるだろう。語り手は読者の自然な意識に基づいて、ナン・シャン号の乗組員達と同質性のある英国人として認識され得る可能性が最も高いと思われる。一般にテキストの語り手の特性について考えてみることは、テキストの読みの可能性を拡大する上で、重要な着眼点の一つである。語り手の特性を推定する作業においては、民族、言語、国籍、階層、年齢、性別といった要素について具体的に検討する必要がある。

テキストの語り手は、細部に注意を払いながら、詳しくクーリー達の状況を描き出していく。またクーリー達がどのような労働に従事してきたのかという情報についても、具体的に読者に伝達している。そしてクーリー達の文化的背景、価値基準に対しては、自己のそれとの差異を認識しながら語っているといえよう。なぜ語り手はクーリー達に関して、このように詳細に語るのであろうか。ここに語りという行為それ自体の動機として、未知なる東洋というイメージに基づく他者的なるものの全般に対する強度の関心というものを、想定することも可能となるだろう。さらにこの語りの動機を読者の意識の側に転換してみるならば、読者自身の珍しい物語内容に対する期待値の高さを示すことになるだろう。

テキストの語り手がクーリー達各自の所持している金銭に言及していることには、充分に留意する必要がある。この金銭が、後にクーリー達の間で発生する騒乱の原因となるのである。ナン・シャン号は、船外における暴風雨、船内における騒乱という二重の危機にさらされる。このような意味において物語内における船の動きの起点の語りは、テキスト内に発生する事件の生成条件を、読者に予告的に指し示しているといえよう。

このようにテキストの語りの主体としての語り手の言説を精査していくと、読者には語り手の思考的位置が見えてくるだろう。そして、当然のことながら、この語り手のクーリー達に対する視線、認識の構造は、現代の批評的読者の思考によって、対象化、相対化される必要がある。テキスト内での共同体と他者という形での異文化接触状況の読解において、読者は物語内当時の社会的背景として、民族間の階層的差異性に注意する必要がある。

テキストの語りの主体の言説によって、ナン・シャン号は現在の航海において、この民族間の階層的差異性を内包する空間となっていることが読者に提示されている。テキストの読解過程においては、船という閉ざされた空間での共同体に内在する差異の意識が構造化されていく。ナン・シャン号は、異民族という他者を運んでいる。この他者性がテキストの語りの主体および登場人物達の語り口に影響を与え、テキスト読解における問題点を生成していくのである。

テキストの語りに「植民地」というキーワードが出現することにより、読者はこの“Typhoon”というテキストの位置する歴史的状況を、的確に認識することになるだろう。また「クーリー」という言葉は、異民族という他者それ自身の共同体内部構造に内在する階層的差異性を、最も先鋭的に指し示す記号であると考えられる。このようなテキストの語りの主体の言説の基調は、登場人物達の語り口、視線の基調とも連動するものであり、テキスト内においてクーリー達は、完全には理解され得ない他者として表象されていくのである。

“Typhoon”のテキストは、全体で六章から構成されている。汽船での航海が物語内容の基軸となっているため、物語内の時間の流れに関しては、基本的に複雑な移動操作は施されていない。ただし第一章に関しては、テキストの語りの主体が物語内の現在の時間の流れから離れて過去に遡り、マックワー船長に関する多くの情報をテキスト化して読者に伝達している。第一章の語りにおいては、マックワー船長の両親、マックワー夫人と娘と息子、ナン・シャン号を建造した造船所の経営者、一等航海士ジュークス、機関長ソロモン・ラウト、ラウト夫人といった人物達が登場して、マックワー船長の人物像に関する様々なエピソードが読者に紹介されていく。テキストの語り手の視点も含めて各人物の視点から、マックワー船長の人物像が読者の意識に素描されていくのである。

このような読解過程において、読者は変わり者マックワーというイメージを得ることになるだろう。周囲の人々から風変わりな人物と見なされているマックワー船長自身が、共同体内部において他者性を帯びていると考えることも可能であるだろう。ここで他者性という観点から、“Typhoon”のテキストの構造を整理しておこう。ナン・シャン号という英国の共同体に、異民族である中国人クーリー達が他者として組み込まれている。これがテキストの表層レベルの構造である。ナン・シャン号を中心とした英国の共同体内部の人間集団のレベルにおいては、マックワー船長自身の共同体に対する他者性が浮上してくる。マックワー船長の周囲の人々との関係性についての語りは、彼の言動が、社会的一般性、標準性の範疇から逸脱する傾向にあることを読者に提示している⁴⁾。さらにこの共同体の内部構造を掘り下げていくならば、読者は様々な他者性の発見という段階に至るであろう。共同体内部における同質性および他者性といったものは、どのような条件によって確定し認識されるのであろうか。そしてこのような思考を進めていくと、最終的には「自己と他者」という一般的問題に到達するはずである⁵⁾。本論においては、物語構造内における他者クーリー達の存在を、テキスト内における他者性に関して思考することの出発点と位置付けて、読解を進めていくことにする。

4) 物語内レベルにおけるマックワー船長の風変わりな性格は、多くの読者の注目するところである。本稿においては、マックワーの性格を文芸作品内の人物像の問題として考えている。この性格を一つのケースとして、心理学、精神病理学の観点からテキスト外部の一般的問題へと発展させることも可能であろう。

5) 『コンサイス20世紀思想事典』(第2版、三省堂、1997年)の「他者」の項(執筆者、豊崎光一)においては、次のように説明されている。「一般的には、〈同一者〉がその反対概念であり、〈差異〉〈違うこと〉もその一形態であると考えられるが、差異＝違うことが他者性を認める知的操作にかかわるのに対し、〈他者〉のほうはとりわけ、同一者たる主体と区別され対立する客体的な存在そのものをさすであろう。しかし、この古典的定義は、現代における〈他者〉という概念の含蓄を尽くすことができない。なぜならば〈他者〉は、一方の極において自己ないし同一者にとって根源的に異質な、外在的・超越的存在(例えば神)をさすものでありつつ、他方の極においては、自分のまだ知らないもう一つの自分をもさしうるからである。すなわち、それは同一者と無限に遠くかつ無限に近いという二重のありようをはらんでいるのである。」

2

テキストの第一章においては、主要な登場人物達の人物像、経歴、生活状況等に関する情報が、象徴的エピソードの組み合わせという効果的な方法によって印象深く読者に伝達される。読者はテキスト第一章の読解過程において、ナン・シャン号がどのような人間集団によって成立している空間なのかを理解する。船という小さな社会集団の質のイメージが、読者の意識に形成されるのである。そしてテキストの第二章からは、物語内容の時間が、船の航行に沿う形で直線的に流れ始める。

テキストの第二章において語り手は、第一章で一度提示された「気圧計の値の低下」の場面を受けて、不快な蒸し暑さに包まれたナン・シャン号内部の状況を語り始める。テキストの語りは、クーリー達の様子を次のように詳細に描写していく。

The sun, pale and without rays, poured down leaden heat in a strangely indecisive light, and the Chinamen were lying prostrate about the decks. Their bloodless, pinched, yellow faces were like the faces of bilious invalids. Captain MacWhirr noticed two of them especially, stretched out on their backs below the bridge. As soon as they had closed their eyes they seemed dead. Three others, however, were quarrelling barbarously away forward; and one big fellow, half naked, with herculean shoulders, was hanging limply over a winch; another, sitting on the deck, his knees up and his head drooping sideways in a girlish attitude, was plaiting his pigtail with infinite languor depicted in his whole person and in the very movement of his fingers. (pp. 20-21)

この引用部分の直前にマックワー船長は、海図室から船橋へと移動している。そして船長は、甲板にいるクーリー達に眼を向ける。ここでの語り手の視線は、マックワー船長の視線とほぼ重なっていると考えてよいだろう。語り手は観察者として、クーリー達の様子を精細に描写していく。読者は、語り手の使用している比喩的表現の効果にも充分に留意する必要があるだろう。これによって、クーリー達のイメージが強化されている。このような語り手によるクーリー表象においては、色彩、雰囲気、感覚、感触といった要素の言語化において、読者の意識にクーリー達の存在それ自体の意味が付与され、全般的印象が形成されるのである。語り手および船長は見る者であり、クーリー達は一方向的に視られる対象である。見る側の語りの言説は、基本的には客観性に基づいて表出されたものであろうが、それと同時にある程度の主観性および先入観を帯びてもいるだろう。語りにおいて口論しているクーリー達の様子は、“barbarously”と修飾されている。これは、語る側の聴覚において、クーリー達の声がどのようなイメージに基づいて認識されているのかを示すものであるだろう。一般に未知なる他者とは、その言語を理解し得ぬ存在である。民族間の階層的差異性においては、言語理解の問題が大きく作用しているものと思われる。

第一章においては、中国人クーリー達を福州まで運ぶことに関する準備段階での打ち合わせの様子が描かれる。ブン・ヒン商会の事務員である悲しげな、落ち着き払った中国人を連れてきたマックワー船長は、機関長ラウト、次いで一等航海士ジュークスに次のように指示を与える。

Then Jukes was directed in the same subdued voice to keep the forward 'tween-deck clear of cargo. Two hundred coolies were going to be put down there. The Bun Hin Company were sending that lot home. Twenty-five bags of rice would be coming off in a sampan directly, for stores. All seven-years'-men they were, said Captain MacWhirr, with a camphor-wood chest to every man. The carpenter should be set to work nailing three-inch battens along the deck below, fore and aft, to keep these boxes from shifting in a sea-way. Jukes had better look to it at once. “D’ye hear, Jukes?” This Chinaman here was coming with the ship as far as Fu-chau—a sort of interpreter he would be. Bun Hin’s clerk he was, and wanted to have a look at the space. Jukes had better take him forward. “D’ye hear, Jukes?” (pp. 12-13)

テキスト第一章の読解過程において読者の意識には、すでに鈍重なマックワー船長というイメージが形成されている。またそれと同時に読者には、船長の職務上の有能さを示すエピソードも提示されている。マックワー船長は造船所において、ナン・シャン号の船室のドアの錠前の欠陥を一目で見抜いて指摘したのである。(p.8) ここに引用した船長のジュークスに対する指示内容も、要領よく簡潔に情報が整理されており、航海の準備としては誠に的確なものである。ジュークスによる案内の場面までテキストを読み進めることにより、福州までの航海期間中のクーリー達の船内における状態の概要が、イメージとして読者の意識に形成されていく。船長は、荒波に備えて櫃が動かないようにするための板を取り付けるよう指示を出している。このように荷物に関しても、適切な措置が講じられる。しかしながら、結果的にこの措置は、後に遭遇する暴風雨に対しては、全く役に立たなかったのである。クーリー達も含めて物語内の時間の経過における積荷の状態に着目するならば、整頓から散乱そして再整理へと変化している。船内全体の状況としてまとめてみるならば、秩序から混乱そして秩序の回復として図式化することができるだろう。

ジュークスは船長の指示に従って、ブン・ヒン商会の事務員を船内へと案内する。その状況は、先の引用部分に続けて次のように語られる。

Jukes took care to punctuate these instructions in proper places with the obligatory “Yes, sir,” ejaculated without enthusiasm. His brusque “Come along, John; make look see” set the Chinaman in motion at his heels.

“Wanchee look see, all same look see can do,” said Jukes, who having no talent for foreign languages mangled the very pidgin-English cruelly. He pointed at the open hatch. “Catchee number one piciee place to sleep in. Eh?”

He was gruff, as became his racial superiority, but not unfriendly. The Chinaman, gazing sad and speechless into the darkness of the hatchway, seemed to stand at the head of a yawning grave. (p. 13)

この場面においては、民族間の傾斜的關係性に基づいた人と人との間に生ずる言動の具体例が表現されているといえよう。ジュークスの態度は人種的優越感に基づくぶっきらぼうなものであったが、不親切ではなかったと語り手は説明する。ジュークスの言動を外側から客観的に見てみると、口調や態度における微妙な揺るぎ、二重性が感じられるのである。これは、人種的優越感を自覚した上で他者に関わる際に、この優越意識を自己の内面においてどう処理するかという複雑な心理的メカニズムの、言語的および身体的表出として考えることができるだろう。福州まで同行する中国人事務員は通訳の役割を担うのであるが、使用される言語がピジン英語であることに留意する必要があるだろう⁶⁾。意思疎通の手段としてピジン英語を使用することは、事務員、ジュークス双方に対して、心理的な影響を与えるであろう。双方のそれぞれが、ピジン英語という言語それ自体に対して、不完全さ、不自由さといった感覚に基づく心理的距離感を抱くものと思われる。一般論として英国人と中国人との間の言語コミュニケーションにおいては、ピジン英語を使用する場合以外には、中国語を使用する場合とイギリス英語を使用する場合が考えられるだろう。異民族間の言語コミュニケーションにおいては、使用される言語の種類に応じて、当事者の間にそれぞれ固有の心的力学が生成してくるものと思われる。

説明を続けるジュークスは熱心になってきて、身体的動作を交え始める。その様子をテキストの語りは、先の引用に続けて次のように描写する。

6) 『現代社会学事典』(弘文堂、2012年)の「ピジン語」の項においては、次のように説明されている。「ほとんどの場合、ピジン語は標準的な文法や正書法をもたず、また必要な接触の場が消滅すると、言語自体も消滅する傾向にある。こうした特徴からピジン語は権威ある言語とはみなされず、その話し手が社会的・文化的に劣位に見られることも多い。」テキスト内において中国人事務員および中国人クーリー達は、劣位の側に位置付けられている。中国人達の共有する社会的、文化的価値観は、テキストの背後に隠れてしまい、テキストの語りの視界に入っていない。このことに、現代の読者は留意する必要がある。

“No catchee rain down there—savee?” pointed out Jukes. “Suppose all’ee same fine weather, one piecie coolie-man come topside,” he pursued, warming up imaginatively. “Make so—Phooooo!” He expanded his chest and blew out his cheeks. “Savee, John? Breathe—fresh air. Good. Eh? Washee him piecie pants, chow-chow top-side—see, John?”

With his mouth and hands he made exuberant motions of eating rice and washing clothes; and the Chinaman, who concealed his distrust of this pantomime under a collected demeanour tinged by a gentle and refined melancholy, glanced out of his almond eyes from Jukes to the hatch and back again. “Velly good,” he murmured, in a disconsolate undertone, and hastened smoothly along the decks, dodging obstacles in his course. He disappeared, ducking low under a sling of ten dirty gunny-bags full of some costly merchandise and exhaling a repulsive smell. (pp. 13-14)

熱心にパントマイムを演ずるジュークスとそれを見る中国人事務員との心理的差異は、読者の意識に強く印象付けられるだろう。これは、民族間の傾斜的差異の構造が具体化された場面である。事務員は、自分達自身の身体性、生活習慣を模倣したパントマイムを、説明という形式において見させられているのである。おそらくジュークスの演ずるパントマイムは、クーリー達の民族的特性を、ある程度の誇張を加えながら演じているものと思われる。中国人事務員は外面的態度と内面的心情との落差を意識しながら甲板上を移動していき、やがてジュークスの視界から消える。この場面で描かれているジュークスと事務員との間の関係性は、他者との接触において生成するところの言語、身体、心的レベルにおける相互的反応のメカニズムの具体例として、読み取ることができるだろう。テキストの語りは、物語内当時の民族的序列感覚を象徴的に表現しているのである。

3

一般に人間が他者を自覚的に他者であると意識するところの根拠は、何であろうか。自己と他者とを比較対照的に認識する機会が付与され、そこに著しい差異性を見いだすとき、我々は他者の他者性を強く意識するだろう。人間存在間には、様々なレベルにおいて差異が生ずるであろうが、その中で最も顕著な差異の発生源として、言語を位置付けることが可能だろう。常識的なレベルにおいて、高度な言語を使用することが人間を特徴づける重要な要素の一つであることを、我々は理解している。一つの角度からの見方ではあるが、人間存在の基盤は言語であると言ってもよいだろう。言語的差異は、他者性に関する意識、認識の有力な生成起点である。異なる言語間の接触において、この言語的差異は最大値を示すことになるだろうが、同一言語内においても言語理解のレベル差という形で言語的差異が生ずるのである。高度な言語使用のレベルにおいて、言語は言語それ自体の特性により、様々な機能を発動する。例えば、含意、あや、比喩、曖昧性といった言語の働きは、実際の言語使用者個別のレベルを超えて、一般的な言語の記号体系レベルにおいて把握、理解されるものである。

テキスト内においてマックワー船長は、船内の英国的共同性に対して他者性を示している。その他者性は、特に一等航海士ジュークスとの会話における言語理解の独特なずれとして複数回描写されている。台風の接近に伴い蒸気が充分にあがらなくなったことにいら立つ二等機関士は、ジュークスとの会話において暴言を吐く。(p.24) この様子を目撃した船長とジュークスとの間に次のような会話が始まる。

When Jukes turned, his eyes fell upon the rounded back and the big red ears of Captain MacWhirr, who had come across. He did not look at his chief officer, but said at once, “That’s a very violent man, that second engineer.”

“Jolly good second, anyhow,” grunted Jukes. “They can’t keep up steam,” he added, rapidly, and made a

grab at the rail against the coming lurch. (pp. 24-25)

船長が二等機関士のことばの表層的表現および態度を問題視しているのに対して、ジュークスは、なぜそのような言動が発生したのかということばの深層レベルにおける心理的メカニズムを理解しており、二等機関士をかばっている。しかしながら、マックワー船長には、このようなジュークスの説明は理解されないのである。テキストの語りは、次のように続けられる。

Captain MacWhirr, unprepared, took a run and brought himself up with a jerk by an awning stanchion.

“A profane man,” he said, obstinately. “If this goes on, I’ll have to get rid of him the first chance.”

“It’s the heat,” said Jukes. “The weather’s awful. It would make a saint swear. Even up here I feel exactly as if I had my head tied up in a woollen blanket.”

Captain MacWhirr looked up. “D’ye mean to say, Mr. Jukes, you ever had your head tied up in a blanket? What was that for?”

“It’s a manner of speaking, sir,” said Jukes, stolidly.

“Some of you fellows do go on! What’s that about saints swearing? I wish you wouldn’t talk so wild. What sort of saint would that be that would swear? No more saint than yourself, I expect. And what’s a blanket got to do with it—or the weather either. . . . The heat does not make me swear—does it? It’s filthy bad temper. That’s what it is. And what’s the good of your talking like this?”

Thus Captain MacWhirr expostulated against the use of images in speech, and at the end electrified Jukes by a contemptuous snort, followed by words of passion and resentment: “Damme! I’ll fire him out of the ship if he don’t look out.” (p. 25)

ここでの会話においては、完全に字義通りにしか言語表現を理解し得ないというマックワー船長の言語意識が、全面的に表出している。ジュークスの言説に対する疑問、批判という形で、彼特有の論理が短いながらも鋭く展開されている。このようなマックワー船長の言説の強度は、同時に彼自身の他者理解の不可能性の強度をも示しているといえよう。マックワー船長特有の言語意識は、言語機能的に他者性を帯びており、言語共同体の中心部から意味論的に逸脱していくのである。上記の引用場面によって読者は、言語使用における修辭的領域の機能の重要性を、改めて認識することになるだろう。我々の一般的な言語的経験に則して考えてみると、この修辭的領域は、無意識的なレベルにおける他者相互の共通了解対象として、具体的言語表現の形で表出されていることが理解されるのである。

台風の暴風雨に巻き込まれたナン・シャン号の船内においては、クーリー達の間には騒乱状態が発生する⁷⁾。この騒乱は、やがて一等航海士ジュークス達船員の努力により沈静化する。テキストの語りは、沈静化の様子を次のように描写する。

The coming of the white devils was a terror. Had they come to kill? The individuals torn out of the ruck became very limp in the seamen’s hands: some, dragged aside by the heels, were passive, like dead bodies, with open, fixed eyes. Here and there a coolie would fall on his knees as if begging for mercy; several, whom the excess of fear made unruly, were hit with hard fists between the eyes, and cowered; while those who were hurt submitted to rough handling, blinking rapidly without a plaint. (p. 78)

7) クーリー達の騒乱に関しては、群集心理、モップ、パニックといった社会学的概念によって説明が可能であろう。さらに、クーリー達の所持している財産が、数年間の苦役によって得られたものであるという物語内事情により、この騒乱固有の心理的背景が理解されるだろう。

集団的騒乱状態から個別状態へと引き戻されたクーリー達は、支配的他者であるジュークス達との間の傾斜的力学関係によって、視られる存在、語られる存在としてテキスト化されていく。クーリー達の騒乱は、同質的な集団内における争いであった。激しい騒乱にもかかわらず死者が出なかったことは、ジュークスを驚かせる。(p.80) このことに関しては、同質的な集団であるがゆえに死を回避するという、無意識的レベルにおける集団的相互了解のメカニズムが機能していたのではないかと推測されるのである。

沈静化後のクーリー達の他者性の強度は、テキストの語りにおいて極度に増大する。クーリー達は、次のように描写される。

Suddenly one of the coolies began to speak. The light came and went on his lean, straining face; he threw his head up like a baying hound. From the bunker came the sounds of knocking and the tinkle of some dollars rolling loose; he stretched out his arm, his mouth yawned black, and the incomprehensible guttural hooting sounds, that did not seem to belong to a human language, penetrated Jukes with a strange emotion as if a brute had tried to be eloquent. (p. 80)

ここで描写されているクーリーの様子には、ある程度までの客観性が保たれているであろう。しかしながら、語りの主体によるクーリー表象言説の深層構造においては、心的レベルにおけるマイナス方向へのイメージ化が行なわれているものと思われる。語りの主体の他者に対する認識の心的構造において、強度の先入観が生成しているのである。母国語の異なる他者の発話は、状況次第で聞く側にとっては、意味不明な雑音となり得るだろう⁸⁾。そこから動物の声、動物化、野蛮性といったイメージの連鎖が生成し始めるのである。現代の意識的な読者は、テキストの語りの主体の認識や判断それ自体の根拠を、常に相対化、対象化しながら、テキストの深層構造における他者表象のメカニズムを解析する必要があるだろう。

“Typhoon”のテキストの最終段階は、一等航海士ジュークスの書いた手紙の文面となっている。手紙を受け取った大西洋航路の定期船に勤務する親友が、同僚に手紙をみせるという形で、テキスト化されるのである。このジュークスの手紙の文面を語りのテキストとして精読していくと、この語りの言説にも“Typhoon”のテキストの語りの言説に内在する特性と同質の特性が見いだされる。ジュークスは、ナン・シャン号が台風を切り抜けた後のクーリー達の様子を次のように描写している。

“The hatches had been taken off already, and they were all on deck after a night and a day down below. It made you feel queer to see so many gaunt, wild faces together. The beggars stared about at the sky, at the sea, at the ship, as though they had expected the whole thing to have been blown to pieces. And no wonder! They had had a doing that would have shaken the soul out of a white man. But then they say a Chinaman has no soul. He has, though, something about him that is deuced tough. There was a fellow (amongst others of the badly hurt) who had had his eye all but knocked out. It stood out of his head the size of half a hen’s egg. This would have laid out a white man on his back for a month: and yet there was that chap elbowing here and there in the crowd and talking to the others as if nothing had been the matter. They made a great hubbub amongst themselves, and whenever the old man showed his bald head on the foreshore of the bridge, they would all leave off jawing and look at him from below. (p. 101)

8) Conrad の “Amy Foster” においては、船の難破により英国の田舎町に打ち上げられた男ヤンコーが、全く言葉の通じない状況において、助けを求めているにもかかわらず、住民達から危険視される状況が描かれている。

以上のテキストのジュークスの言説においては、西洋人と中国人との間に存在する著しい差異の感覚が、無意識の前提となっているものと思われる。クーリー達の状態に関するジュークスの判断、認識といったものは、すべて彼の心的構造に内在する中国、東洋に対するイメージに基づいているといえよう。このような東洋的なものに関する原的イメージを起点としたイメージ化の作用により、クーリー達の特性に関して、“deuced tough”といった強い印象が与えられ、誇張的表現による語りが生み出されているのである。

以上、テキスト“Typhoon”を他者という観点から読解し、このテキストが内包する問題点について考察してきた。テキストの言説が生成するところの基層レベルに着目することにより、読者は他者という概念の根拠を問い直すことが可能となるのである。このようなテキストを生み出した作者 Conrad にとって、他者とは何を意味していたのであろうか。英国に帰化したポーランド人 Conrad にとって中国をはじめとした東洋はどのような原的イメージによって認識されていたのであろうか。読者によるテキストの精密な読みを出発点とする作者像 Conrad の探求においても、テキストに内在する他者性の問題は、複合的、多層的意味の生成起点となっているのである。

